資料館ノート　第85号　　平成23年5月16日発行

広重の旅と名所絵①

名所絵師広重の誕生と「名所江戸百景」

江東区深川江戸資料館

歌川広重は、葛飾北斎や歌川豊国、国貞などと共に江戸時代を代表する人気浮世絵師の一人です。「東海道五拾三次」や「名所江戸百景　大はしあたけの夕立」は、誰もが一度は目にしたことのある名作です。広重の活躍した時代、浮世絵の主流は役者絵や美人画でしたが、広重はそれらとは一線を画した名所や風景を題材とする作品で独自の世界を築き、その画風から、「抒情の絵師」「旅の絵師」と評されてきました。

平成23年度の資料館ノートでは本号から6回にわたり「広重の旅と名所絵」というテーマで連載します。広重の名所絵は、そのリアリティの高さから、実地に取材したものと受け取られがちですが、名所図会などの挿絵をもとに描かれたものも多いとされています。広重の作品が、どのようにして生み出されたのか、広重の生きた時代、広重の手法、広重の旅の実態と作品との関わり、元絵との関係など、作品とともに紹介していきます。今回は、名所絵師としての広重、そして、最晩年の作品で、江戸とその近郊の名所を描いた「名所江戸百景」です。

1．名所絵師・広重の誕生

広重は、寛政9年（1797）、定火消（じょうびけし）同心の安藤源右衛門の子として、江戸城すぐそばの八代洲河岸（やよすがし）に生まれました。幼名は徳太郎、のちに鉄蔵、また重右衛門、徳兵衛と伝えます。安藤広重の名で呼ばれることのあるのは、生家の名字、安藤によるものです。幼少の頃から絵が得意であった広重は、15歳頃に、火消同心の傍ら、歌川豊広（うたがわとよひろ）に入門をします。豊広は、人気・実力ともに随一だった豊国の弟弟子にあたります。入門後の広重は、師の号「豊広」の「広」と本名「重右衛門」の「重」をとって「広重」の画号を許されます。師の豊広は、静かな画趣を特色とする上品な美人画などを描いていましたが、名所絵版画も手がけており、広重はそうした師の画風に影響を受けながら学んでいったものと思われます。

そして、文政6年（1823）、27歳の時に火消同心職を安藤仲次郎に譲った後は、専業の画工としての道を歩むことになります。文政13年、斎号を「一幽斎」と改めた広重は、次第に名所絵風の作品を発表するようになっていきました。「幽」の字には静か、深いなどの意味があり、広重が求め続けた画風の境地に重なってくるかのようです。その後広重は、斎号を一立斎とし、新たな名所絵の境地を模索し続け、数々の名作を世に送り出すこととなります。

2．広重の名所絵

役者絵や美人画が主流の浮世絵界で、名所絵、風景画を一つのジャンルとして確立させたのは、北斎と広重でした。二人は、天保2年（1831）に「富嶽三十六景」、「東都名所」を刊行しています。この広重の、通称一幽斎描（が）き「東都名所」は、大判横絵十枚揃で、江戸の名所を舶来化学染料のベロ藍を使い遠近感を持たせる手法で描いた作品でした。そして、天保4年には、出世作となる「東海道五拾三次」を出し、名所絵師としての広重の名を不動のものとしました。嘉永6年（1853）の『當代全盛江戸高名細見（江戸寿那古細撰記）』には、「豊国にかほ」「国芳むしや」に続き「広重めいしよ」とあり、人気浮世絵師にランキングされています。生涯にわたり、街道物、名所物、さらには花鳥画などでヒット作を生み出した広重ですが、それらの作品には広重独自の作画姿勢や手法が見られます。その代表的なものが「写真（しょうつし）」です。「写真」については広重自身が度々述べておりますので、一例を引用してみます。

●『絵本江戸土産』四編序文

「江都に名高き勝景の地、専ら写真を旨として」①

「市中の塵肆男女の風俗、今目前に視るごとき、景勢を図せんと思ふ。」②

「名所江戸百景」との関係性も指摘されている『絵本江戸土産』は、嘉永3年(1850)に刊行されています。

ここで述べられているような作画姿勢については、広重研究において言及されてきており、その意は、実景実写ではなく意図的に様々な改変が加えられたものとされています。その改変の在り方こそが広重の魅力であり、例えば、浅野秀剛氏は「広重の虚構は、人々の抱くその土地土地のイメージ、風土のイメージを基調とし、それを裏切らない方向にのみ改変するので幅広い人々に支持されたのである」と述べています。(「広重の風景画の虚構」『広重「浮世絵を読む」5』(1998年、朝日新聞社)。そして、広重の個性が十分に発揮された代表作が、最晩年の「名所江戸百景」でした。

3. 江戸を描いた傑作「名所江戸百景」

名所絵師広重が追及し続けたテーマに江戸があります。「名所江戸百景」は、安政3年(1856)から同5年の3年にわたり、版元魚栄より上梓されており、118点の作品(一部、二代広重の作ともされる)に、安政6年に出された二代広重の1点と玄魚による目録を加えて計120点になります。ジャポニズムの象徴とも評され、展覧会でも頻繁に紹介されてきました。

本作品の成立や特徴については、様々な指摘がなされてきました。例えば、それまで描かれることのなかった江戸の新しい名所や年中行事などが題材に取り上げられていることなどです。その背景には、江戸という都市の発展と成熟、伝統性や由緒意識に対する芽生えがあると考えられています。天保7年(1836)に刊行された『江戸名所図会』もそうした江戸の成熟と深い関わりがあり、約20年後に出された「名所江戸百景」は、その延長線上にあると言えるのでしょう。そして「名所江戸百景」の中でも、早い時期に刊行された作品には、『江戸名所図会』の挿絵(さしえ)によるものもみられ、種本的存在でもあったことが言われています。広重は、こうした種本をもとにしながらも、独自の手法により再構成し、あたかも実地で写生をしたかのようなリアリティのある、独特の抒情溢(あふ)れる作品の創作に成功したのです。その広重がこだわった手法に、縦絵(たてえ)画面の採用と近像型の構図がありました。近像型構図は、絵の主題と関係のある事物を象徴的に近景に大きく描写し、そのアングルから遠景を見るというもので、刊行年の後半になるほど、名所を俯瞰(ふかん)的に描く一般的な構図より多くなっています。広重はこの縦絵において、空間的・時間的な「奥行き」を追求したとも言われています。さらに、こうした描かれた内容や描かれ方などから、主な享受者層を、江戸に長く住む人々であったのではないかと推測する説も出されています。

ところで、この「名所江戸百景」が刊行された時期は、日本が諸外国からの脅威にさらされ、安政の大地震もあり、内憂外患の不安定な時期に入っていました。しかし、広重の絵からはそうした社会情勢は直接的には窺(うかが)えません。「名所江戸百景」は、広重が描いた江戸像であり、リアルであっても必ずしも江戸の実態ではないということなのでしょう。

広重の名所絵の本質には、旅の実感、風景との交感があるとも言われます。広重が名所絵をどのように生み出し、何を伝えようとしたのか、そして私たちはその作品からはなにを読み取ることが出来るのか、今後の研究に託されています。「名所江戸百景」についても様々な解釈がなされてきました。最近では、報道画としてのメディア性や護符(ごふ)としての吉祥(きっしょう)性など新たな解釈も出され、注目されています。

安政5年、「名所江戸百景」の刊行のなか広重は、62歳でこの世を去ります。三代豊国(国貞)による死絵には、「東路へ筆をのこして旅のそら　西のみ国の名とところを見舞」の辞世がしたためられ、最後まで名所への旅を求めた名所絵師広重の志を表しています。

4. 江東区域の「名所江戸百景」

「名所江戸百景」では、全体的な傾向として、水の景色、江戸の東郊が多く描かれていますが、江東区域も14点あります。傑作と呼ばれる作品(表中8、12、13)は後半に刊行され、12、13はゴッホが模写したことで有名です。

	題名	刊行年	構図
1	砂むら元八まん	安政3年4月	俯瞰
2	亀戸天神境内	安政3年7月	近像型
3	小奈木川五本まつ	安政3年7月	やや近像
4	深川木場	安政3年8月	水平視
5	永代橋佃しま	安政4年2月	近像型
6	逆井のわたし	安政4年2月	俯瞰
7	中川口	安政4年2月	俯瞰
8	深川洲崎十万坪	安政4年閏5月	近像型
9	五百羅漢さゞゐ堂	安政4年8月	俯瞰
10	深川八まん山ひらき	安政4年8月	俯瞰
11	深川三十三間堂	安政4年8月	俯瞰
12	大はしあたけの夕立	安政4年9月	俯瞰
13	亀戸梅屋舗	安政4年11月	近像型
14	深川万年橋	安政4年11月	近像型

大久保純一氏の「《名所江戸百景》考」(『広重と浮世絵風景画』所収)をもとに作成